D-4

ドイツ語の長距離受身構文における複合動詞形成

高畑明里

(東京大学大学院　akarith@phiz.c.u-tokyo.ac.jp)

要旨

ドイツ語の長距離受身構文では、量化表現や副詞、否定辞などが不定詞補部内で解釈されず、必ず主節で解釈される。Keine & Bhatt (2016) はこの意味制約を不定詞と主節動詞との複合動詞形成により説明した。本研究は、複合動詞形成に加え、Müller (2017; 2018; 2019) で提案されている構造を除去する操作 Remove を適用することで、長距離受身構文に関わるデータをより適切に説明できることを示す。特に、Remove は統語的派生の中での構造の再分析を可能にするため、不定詞補部の構造についての証拠の対立を解消できる。同様の分析は、日本語の「忘れる」などの統語的複合動詞 (cf. 影山 1993)を含む構文にも適用可能である。

Remove は主節動詞の選択特性により引き起こされる操作と解釈できる。本研究では、Wurmbrand & Lohninger (to appair) の補文の意味分類に従えば、長距離受身構文の場合は補文が独自の Event を形成しておらず、主節動詞により *v*P よりさらに小さな構造が選択されていると考える。

1. はじめに

ドイツ語の一部のコントロール構文では、主節の動詞が受身化した際に、不定詞の目的語が主語として昇格する、「長距離受身」が可能である。例えば、(1a) の能動文に対応する受動文 (1b) では、不定詞の目的語 (cf. 下線部) が主格の表示を受けている。

(1) a. dass er [<u>den Traktor</u> zu reparieren] vergessen hat
that he the tractor.ACC to repair forgotten has
"that he forgot to repair the tractor"

b. dass <u>der Traktor</u> zu reparieren vergessen wurde
that the tractor.NOM to repair forgotten was
"that it was forgotten to repair the tractor"

長距離受身構文では、あらゆる要素が不定詞補部内で解釈されず、主節動詞より広い作用域を持つことが観察されている (cf. Bobaljik & Wurmbrand 2005; Keine & Bhatt 2016) 。例えば、(2a) の能動文では太字の量化表現が下線部の主節動詞に対し広い作用域も狭い作用域もとれるのに対し、長距離受身構文の (2b) では量化表現が広い作用域を持つ解釈しか許されない。

(2) a. Gestern hat er **nur einen einzigen Traktor** zu reparieren <u>vergessen</u>.
yesterday has he **only a single tractor.ACC** to repair <u>forgotten</u>
"Yesterday he forgot to repair only one tractor."
[*forget* ≫ *only*; *only* ≫ *forget*] (Keine & Bhatt 2016: 1454)

b. Gestern wurde **nur ein einziger Traktor** zu reparieren <u>vergessen</u>.
yesterday was **only a single tractor.NOM** to repair <u>forgotten</u>
"Yesterday it was forgotten to repair only one tractor."
[**forget* ≫ *only*; *only* ≫ *forget*] (ibid.)

同様の制約は主語に昇格する名詞だけでなく与格目的語 (cf. (3a)) や副詞句 (cf. (3b)) でも見られる。

(3) a. Erst gestern wieder wurde der Fritz **nur einem einzigen Studenten** vorzustellen <u>vergessen</u>.
just yesterday again was the Fritz.NOM **only a single student.DAT** to.introduce <u>forgotten</u>
"Just yesterday it was forgotten to introduce Fritz to only one student."
[**forget* ≫ *only*; *only* ≫ *forget*] (Keine & Bhatt 2016: 1456)

b. Gestern wurde dieser Knopf **fünfmal** zu drücken <u>vergessen</u>.
yesterday was this button.NOM **five.times** to press <u>forgotten</u>
"Yesterday it was forgotten to press this button five times."
[**5.times*(*press*); *5.times*(*forget*)] (ibid.: 1460)

この制約は否定極性表現 (NPI) の認可にも影響する。例えば、(4a) の能動文では太字の NPI が否定の含意を持つ主節動詞により認可されるが、(4b) の長距離受身構文では認可されない。

(4) a. Gestern hat er den Fritz **auch nur einem einzigen Studenten** vorzustellen <u>vergessen</u>.
yesterday has he the Fritz.ACC **also only a single student.DAT** to.introduce <u>forgotten</u>
"Yesterday he forgot to introduce Fritz to even a single student."

b. #Gestern wurde der Fritz **auch nur einem einzigen Studenten** vorzustellen <u>vergessen</u>.
yesterday was the Fritz.NOM **also only a single student.DAT** to.introduce <u>forgotten</u>
"Yesterday it was forgotten to introduce Fritz to even a single student." (Keine & Bhatt 2016: 1457)

一方、話題化などにより不定詞句が移動した場合には、移動した不定詞句内にある要素はその中で解釈される。ただし、(5) のような文は容認度が低く、容認しない話者も存在する。

(5) % [**Nur einem einzigen Studenten** t_2 vorzustellen]$_1$ wurde der Fritz$_2$ erst gestern wieder t_1 <u>vergessen</u>.
only a single student.DAT to.introduce was the Fritz.NOM just yesterday again <u>forgotten</u>
"Just yesterday it was forgotten to introduce Fritz to only one student."
[*forget* ≫ *only*; **only* ≫ *forget*] (Keine & Bhatt 2016: 1479)

2. 先行研究

■ Bobaljik & Wurmbrand (2005)

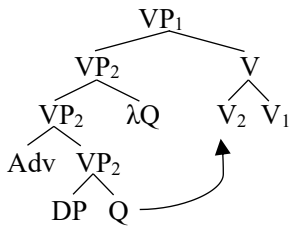
➢ 長距離受身構文の不定詞補部は、その内部で構造格を付与できないため、不定詞の直接目的語は格の認可のために主節へ移動する必要がある。移動した目的語は移動先で解釈されるため、(2b) のような主節解釈が生じる。

➢ 問題点：与格目的語 (cf. (3a)) や副詞 (cf. (3b)) の例を説明できない。

■ Keine & Bhatt (2016)

➢ 不定詞 V_2 が主節動詞 V_1 へ編入して複合動詞を形成する。その複合動詞全体が、意味解釈時の操作によって不定詞の痕跡 Q の位置で解釈されることにより、不定詞補部内のあらゆる要素が複合動詞全体より上で解釈される。

(6)



(Keine & Bhatt 2016: 1469 一部改変)

➢ 問題点：(6) で、統語構造上は複合動詞の方が不定詞補部内の要素より上にあるため、(4b)の NPI に関わる例の説明において問題を孕む。一般に、NPI の認可には認可する要素との統語的関係が関わるとされる。例えば (7) では下線部の否定辞が太字の NPI に先行しなくてはならない。

(7) a. Hans hat nie **auch nur ITALIENISCH** studiert.
Hans has never **even** **Italian** studied
"Hans never even studied ITALIAN.' (Schwarz 2005:134)

b. *Hans hat **auch nur ITALIENISCH** nie studiert.
Hans has **even** **Italian** never studied (ibid.)

したがって(4b) を説明するには、統語構造において主節動詞が不定詞補部内のNPIを認可できる位置にないことを説明しなければならない。

3. 分析の提案

■ 不定詞補部の大きさについて

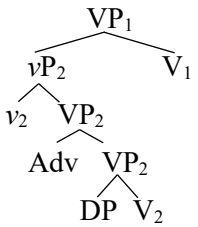
本研究では、Keine & Bhatt (2016) に従い、(2)-(4) に見られる主節解釈を複合動詞形成によるものと想定する。一方で、(5) のように不定詞が句構造を持つ場合も話者によっては許容されることから、少なくとも派生の初期の段階では不定詞は句構造を形成していると考えられる。さらに、Wurmbrand (2003) では長距離受身構文の不定詞句はその内部で対格を付与できないことより *v*P を投射しない VP の大きさであると考えられていたが、Wurmbrand (2015) や Müller (2019) では、不定詞が *v*P かそれより大きな投射を持つことを示唆する証拠が提示されている。例えば、(8) のように不定詞の主語（＝主節の与格名詞句）と同一指示の再帰代名詞が現れる例は、不定詞の主語を導入する *v*P の存在を示唆している。

(8) PRO$_i$ **einander$_i$** zu reparieren empfohlen wurden den Leuten$_i$ die Traktoren nicht
RECIP to repair recommended were the people.DAT the tractors.NOM not
"it was not recommended that the people repair the tractors for each other"
(Müller 2019: 159 訳は発表者による)

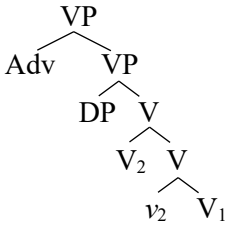
■ Remove (Müller 2017; 2018; 2019)

上記の考察より、主節動詞 V_1 と不定詞 V_2 がそれぞれ独自の句を形成する構造 (9a) から、V_1 と V_2 が単一の複合動詞を形成する構造 (9b) を統語的に派生することを目指す。(9a) で、不定詞の大きさとしては Wurmbrand (2015) に従い *v*P を想定している。

(9) a.



b.

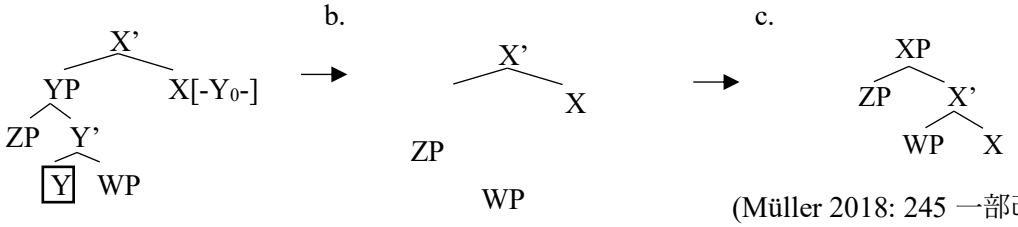


(9) のような派生を行うため、Müller (2017; 2018; 2019) の提唱する構造を除去する操作 Remove を援用する。Remove は構造を形成する Merge と対になる操作で、ある語彙項目の持つ Remove 素性[-X-]によって引き起こされ、X にあたる主要部、補部、指定部をその派生の時点の構造から取り除く。Remove の適用範囲は、(10) に示す条件によって制限される。

(10) Within the current XP α, a syntactic operation may not exclusively target some item δ in the domain of another XP β if β is in the domain of α (Müller 2017: 4)

(11) は Remove が主要部 Y に適用された場合である。X の持つ素性[-Y_0-]が主要部 Y を除去すると、(11b) のように Y の投射が除去され、YP 内にあった要素 ZP と WP が残る。これらは (11c) のように除去後の構造に再結合される。

(11) a. b. c.



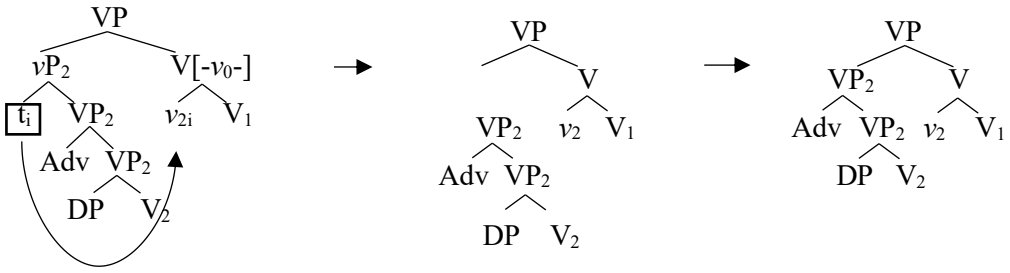
(Müller 2018: 245 一部改変)

除去された主要部 Y の内容は、除去後も何らかの形で復元可能でなければ、正しい解釈が得られない。そこで本研究では、復元可能性を担保するために Remove の適用に先んじて除去の対象となる主要部の内容の編入が起こると想定する。

■ 長距離受身構文の派生

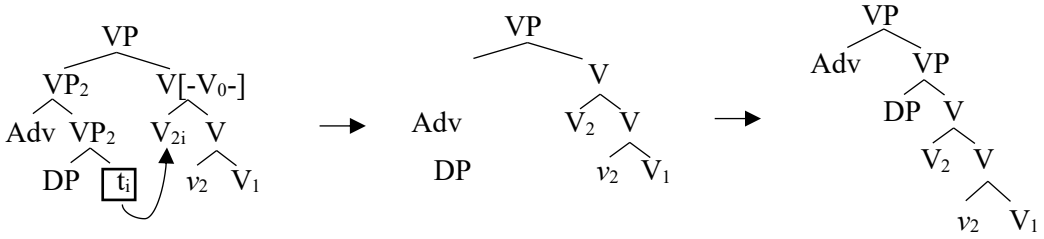
(11) に示した主要部に対する Remove を用いて、(9) で提示した派生を行う。まず、(12a) のように不定詞の v_2 が主節動詞 V_1 に編入し、空になった接点とその投射が、V_1 の Remove 素性[-v_0-]により除去される。vP_2 内に含まれていた VP_2 は、vP_2 が除去された後の構造に再結合される (cf. (12b)) 。

(12) a. removal of v_2 accompanied by incorporation b. reassociation



(12) に続き、同様の操作により V_2 を除去する。VP_2 内に含まれていた要素は除去後の構造に再結合される。その結果、単一の複合動詞の投射のみが存在する (13b) のような構造が派生される。

(13) a. removal of V_2 accompanied by incorporation b. reassociation



■ この分析の長所

(13b) の構造では不定詞句が存在しないため、もともと不定詞句内にあった要素がすべて複合動詞全体より広い意味作用域を取ること (cf. (2)-(4)) が統語構造から直接導ける。NPI の認可に関しては、(4b) が (13b) の構造を持つ場合、主節動詞 V_1 が単独で現れる場合と同様になることが正しく予測される。

(14) #weil er **auch nur ein einziges Wort** vergaß
since he **also only a single word** forgot
Intended: “since he did not remember even one word.”

また、(12b) の構造を経由して段階的に (13b) の構造が派生されることにより、(12b) から VP_2 が移動した (5) のような構造も派生できる。(12b) 、(13b) の両方の構造の存在に関しては、5 節で再び述べる。

さらに、次節で示すように、同様の分析は日本語の一部の統語的複合動詞にも適用できる。

4. 日本語の統語的複合動詞「忘れる」との共通点

日本語の「忘れる」などの一部の統語的複合動詞 (cf. 影山 1993) は、複合動詞の後項動詞として連用形の動詞補部をとるとき、ドイツ語の長距離受身構文と同様の意味制約を見せる。例えば、(15a) の目的語「林檎だけを」や (15b) の付加詞「メアリーだけから」は、「忘れる」より広い意味作用域を取ることができない (cf. e.g., Koizumi 1995; 由本 2005; Takahashi 2011) 。

(15) a. ジョンは林檎だけを食べ忘れた
[* *forget* ≫ *only*; *only* ≫ *forget*] (Koizumi 1995: 62)

b. 太朗は本をメアリーだけから借り忘れた
[* *forget* ≫ *only*; *only* ≫ *forget*] (Takahashi 2011: 245)

さらに、副詞句などが前項動詞を独立に修飾することもできない（cf. e.g., 由本 2005; Tomioka 2006; Kishimoto 2014; 岸本 2015）。例えば、(16a) で副詞「また」は後項動詞の事象にかかる解釈しか持たず、(16b) では意味的に前項動詞しか修飾できないような副詞句「定規で/垂直に」は不適格となる。

(16) a. 太郎は次郎にまた電話をし忘れた [**again (call)*; *again(forget)*] (Tomioka 2006: 5)

b. 健は（*定規で/*垂直に）線を引き忘れた (Kishimoto 2014: 3)

このような性質を持つ後項動詞は同時に、長距離受身が起こるような動詞群でもある。

(17) a. 手紙を出し忘れている → 手紙が出し忘れられている (影山 1993: 152)

b. 門を閉め忘れた → 門が閉め忘れられている (ibid.)

(15) (16) のような例や、長距離受身が可能であることより、影山 (1993)、由本 (2005)、Tomioka (2006)、Kishimoto (2014) などでは不定詞句が *v*P より小さな構造を持つと分析されている。しかし一方で、Takahashi (2011) は (18) に示すような「自分」の束縛現象をもとに、「忘れる」の補部は埋め込み主語を有し、*v*P を投射していると分析している。

(18) 先生$_i$は 学生$_j$に そのニュースを **自分$_{j/i}$の** 地元へだけ 報告させ忘れた。
[**forget* ≫ *only*; *only* ≫ *forget*] (Takahashi 2011: 247 一部改変)

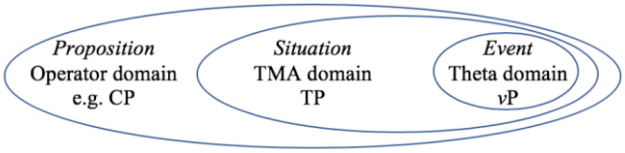
(15) (16) のような例を複合動詞形成により、(17)の長距離受身を不定詞が *v*P を投射しないことにより説明し、かつ少なくとも派生の初期段階には主語導入に関わる *v*P が存在したことを説明する (cf. (18)) ためには、3 節で提示したような分析が有効である。

5. Remove と主節動詞による補部の選択特性

長距離受身が可能な構文は、ドイツ語においては「結束的」(kohärent cf. Bech 1955/57) 不定詞句と称されてきたような、節としての境界性を持たない透明な不定詞補部を含む構文である。このような不定詞補部については、その統語構造をCP/TP未満の小さなものと想定する分析が一般的である。しかし、長距離受身構文や「忘れる」を含む構文について示したように、不定詞補部の大きさについてはしばしば相反する証拠が存在する。このことより近年、派生の途中で完成した構造を除去・削除するアプローチが提唱されている (e.g., Müller 2017; 2018; 2019; Pesetsky 2021)。本研究で使用した Remove (Müller 2017; 2018; 2019) は、主節動詞の持つ素性によって引き起こされるため、もともとは大きな構造 (e.g., *v*P/TP/CP) を持っていた不定詞補部が、主節動詞の選択特性に合う大きさまで構造を除去されるようなモデルを想定している。

主節動詞による動詞補部の選択については、Wurmbrand & Lohninger (to appear)が、主節動詞が Proposition、Situation、Event の３つの大きな意味クラスの補部を選択し、それぞれの意味クラスに対応する最小の補文の構造として CP、TP、*v*P が要求されるようなモデルを提案している (cf. (19))。

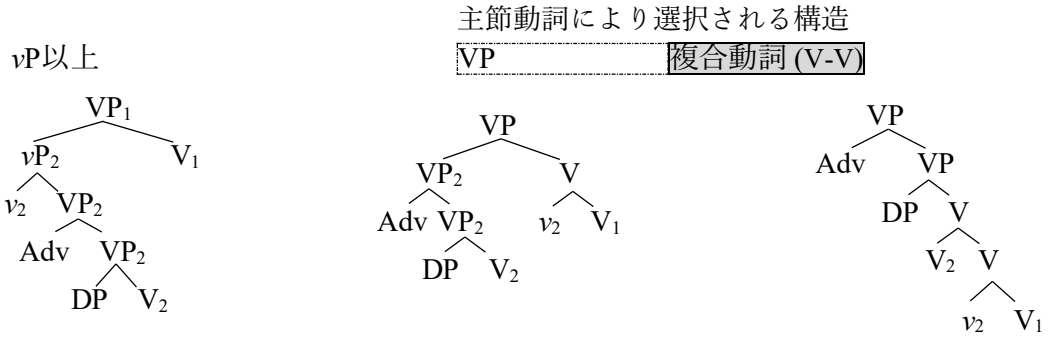
(19)



(Wurmbrand & Lohninger to appear: 32)

本研究では、長距離受身構文や「忘れる」を含む構文においては、不定詞補部が独立の Event さえも形成しておらず、そのことが不定詞補部を独立に修飾することが不可能であることと対応していると想定する。そのため、補部の構造として最低限要求される構造は *v*P よりも小さい構造と考えられる。

(20)



ただし、(20)で示唆しているように、主節動詞により選択される構造の範囲には幅があると考えられる。(2)-(4)の例に関してはKeine & Bhatt (2016)により不定詞補部内での解釈を許すような話者の存在が指摘されており、日本語の (15) (16)のような例についても同様の個人差が見られる。さらに、(5) のように明らかに句構造を保持した例も話者によっては許容されている。したがって、複合動詞構造の方がVP補部構造より好まれるという選好関係があり、それにより(2)-(4) や (15) (16)のような制約が生じるものの、話者によってはVP補部を含む構造も許容されていると考えるべきである。

6. 結語

本研究では、ドイツ語の長距離受身構文や日本語の統語的複合動詞「忘れる」を含む構文に見られる意味制約に対し、Remove (Müller 2017; 2018; 2019) を用いた構造の除去による分析を提案した。さらに、

Remove を補文の大きさを主節動詞の選択特性に合わせるための操作として位置付けた。

参考文献

影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

岸本秀樹 (2015)「出来事の不成立を表す複合動詞について」『語彙意味論の新たな可能性を探 って』由本陽子・小野尚之編、東京：開拓社 pp. 72-101.

由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語 : モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』東京：ひつじ書房.

Bech, G. (1955/57). *Studien über das deutsche Verbum infinitum*. Kopenhagen: Munksgaard [unchanged reprint: 1983. Fabricius-Hansen (Eds). Tübingen: Niemeyer].

Bobaljik, J. D. & Wurmbrand, S. (2005). The domain of agreement. *Natural Language & Linguistic Theory 23*(4), 809-865.

Keine, S. & Bhatt, R. (2016). Interpreting verb clusters. *Natural Language & Linguistic Theory 34*(4), 1445-1492.

Kishimoto, H. (2014). The layered structure of syntactic V-V compounds in Japanese. *Kobe Papers in Linguistics 9*, 1-22.

Koizumi, M. (1995). *Phrase structure in minimalist syntax*. PhD dissertation, MIT.

Müller, G. (2017). Structure removal: an argument for feature-driven Merge. *Glossa: a journal of general linguistics 2*(1) 28, 1–35. doi: http://doi.org/10.5334/gjgl.193.

Müller, G. (2018). Structure removal in complex prefields. *Natural Language & Linguistic Theory 36*(1), 219-264.

Müller, G. (2019). Long-distance passives by structure removal. In A. Murphy (Eds), *Structure removal*, (pp. 113-166). Leipzig: Universität Leipzig.

Pesetsky, D. (2021). Exfoliation: towards a derivational theory of clause size. Ms., MIT. https://ling.auf.net/lingbuzz/004440.

Schwarz, B. (2005). Scaler additive particles in negative contexts. *Natural Language Semantics 13*(2), 125-168.

Takahashi, M. (2011). *Some theoretical consequences of case-marking in Japanese*. PhD dissertation, University of Connecticut, Storrs.

Tomioka, N. (2006). The interaction between restructuring and causative morphology in Japanese. *Proceedings of the 2006 Annual Conference of the Canadian Linguistic Association*.

Wurmbrand, S. (2003). *Infinitives: Restructuring and clause structure*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Wurmbrand, S. (2015). Complex predicate formation via voice incorporation. In L. Nash & P. Samvelian (Eds), *Approaches to complex predicates* (pp. 248-290). Leiden: Brill.

Wurmbrand, S. & Lohninger, M. (to appear). An implicational universal in complementation: Theoretical insights and empirical progress. In: J. M. Hartmann & A. Wöllstein (Eds), Propositionale Argumente im Sprachvergleich: Theorie und Empirie. / Propositional Arguments in Cross-Linguistic Research: Theoretical and Empirical Issues. [Studien zur Deutschen Sprache] Tübingen: Gunter Narr Verlag. https://ling.auf.net/lingbuzz/004550.

本研究は JSPS 科研費特別研究員奨励費 21J21764 の助成を受けている。